

## 編集者川添登の建築ジャーナリズムについての研究

### -川添登が目指した建築ジャーナリズム-

#### Study on architectural journalism of editor Kawazoe Noboru

#### -Architectural journalism Aiming for Kawazoe Noboru-

○田所辰之助<sup>1</sup>, 川股悠大<sup>2</sup>

\*Tadokoro Shinnosuke<sup>1</sup>, Kawamata Yudai<sup>2</sup>

I participated in magazine editing activities and got interested in journalism. In the past research Kawazoe Noboru was evaluated as making a place of architectural journalism, But I think his purpose is not that. I focused on "Traditional Controversy", "Shinkenchiku Problem", "Metabolism" and "Post-Modernism" which Kawazoe is deeply involved. In his criticism there were particularly many mention of modern architecture. First, I think that he was conscious of problems with modern architecture. Second, that he was doing criticism with reconsideration of modern architecture in mind, and architectural journalism was not a "purpose" but a "means" for him.

#### 1. 既往研究

今までの建築雑誌のあり方を見返したときに、ジャーナリズムという活動が一番活動的であったという印象を受けたのが 1950～60 年代である。建築ジャーナリズムに関する様々な評論ではこの時代において当時専門誌「新建築」編集長であった川添登が建築評論の場を雑誌の誌面上に設け、論争を仕掛けるなど建築ジャーナリズムの場をつくらうとしていたと語られていた。

#### 2. 研究目的

川添登の活動において、既往研究で語られるジャーナリズムの場をつくらうとしていたという評価に対して私は疑問を抱いた。それは、川添登の活動の目的がジャーナリズムの場をつくらうとしていたという認識についてだ。私は川添登の活動における目的は近代建築の見直しだと考え、その為、川添登の建築評論を中心に研究をすすめ、ジャーナリズム活動の価値を再認識することと、この人物がジャーナリズム活動を通して目指したものを解明することを研究の目的とする。

#### 3.1.0 日本の建築ジャーナリズムの歴史

日本の建築ジャーナリズムの歴史を説明する時に、大きく時代を 4 つに分類した。

#### 3.1.1 第一期(大正・昭和戦前期)

1881 年の建築雑誌創刊からこの時代は始まり第二次世界

大戦が開戦する 1939 年までの期間の事を指す。建築家と社会の関係が建築についての法律の設定によって佐野利器によって一気に相対化された。主な建築論争は建築虚偽論争や様式論争である。

#### 3.1.2 第二期(戦後・復興期)

終戦を迎えた 1945 年から 1953 年までの日本の復興を目標に住宅の再建や新たに都市計画が行われた時代。戦時中休刊していた雑誌活動が再開されジャーナリズムも復興や再建に関わる題材のものが多い。

#### 3.1.3 第三期(新建築期)

新建築の活動が活発になり、建築雑誌から新建築へ論争の場が移る。川添登が新建築編集長に就任した 1953 年からメタボリズムの活動が分岐していくこととなる 1970 年までの時代。伝統論争や不安感論争、民衆論争など様々な建築論争が繰り広げられた。川添登の登場したこの時代が日本の建築専門誌において一番建築ジャーナリズムが盛んに行われていた時代といえるだろう。

#### 3.1.4 第四期(建築ジャーナリズム衰退期)

メタボリズム・グループの活動が一つの節目を迎えた 1970 年よりあとの時代。1970 年代ごろから近代主義建築への批判が増え建築が社会へ参加しようとする動きがみられる。1974 年の「巨大建築論争」をもって建築ジャーナリズムが影を潜めたといった評論が多く見受けられたた

1:日大理工・教員・建築 2:日本理工・学部・建築

め、衰退期と仮定した。

### 3.2.0 川添登の建築評論

これらの時代の中で私が注目するのは第三期である。この時代において私が特に注目したのは、伝統論争、新建築問題、メタボリズム、ポスト・モダニズムについての評論である。これらの出来事に焦点を当て、年代順に考察していきたい。

#### 3.2.1 伝統論争

丹下健三に川添登が依頼して執筆してもらった「新建築 1955 年 1 月号 近代建築をいかに理解するか」では機能主義に前進するだけではだめで、だからといって伝統建築から形態を持ち出すだけということもよくないとも述べられる。この評論に対して様々な人物が新建築上に伝統との関係を述べる評論を掲載することで論争に発展していく。

#### 3.2.2 新建築問題

1957 年「新建築」の紙面上で村野藤吾の有楽町そごうを批評したことをきっかけに社長が激怒し、当時編集長を務めていた川添登をはじめとした編集部員全員を解雇したという問題。このような誌風の雑誌をつくることで、建築の近代化に対して様々な人が意見を述べやすい環境をつくること。この時期においては既往研究における見解が当てはまるといえる。

#### 3.2.3 メタボリズム

1959 年に菊竹清訓、黒川紀章ら若手建築家たちが行った建築運動。変化する空間、機能を従来の固定されたものから解き放ち古くなった機能が丸ごと新しく取り換え可能であるような計画案が考案され、都市が新陳代謝を行って急速な成長に耐えうるということが可能な構想がなされた。これまで論じられてきた、文明や都市を捨て去るという方法を取り、より高次の段階の新たな都市像を世の中に示した。

#### 3.2.3 ポスト・モダニズム

メタボリズムの後に生じた近代建築批判のこと。川添登

の評論においてはそれまでの建築家たちが機能や構造から造形を追求したことを、工業社会のすることだと捨て去りダイレクトに造形を追求したポスト・モダニズムはアンチ・モダニズムだと述べられている。近代建築を否定することに新たな展開を見た出したポスト・モダニズムを批評することで自身の思い描く日本建築のその後の軌道を修正していたと考えた。

## 4. 結論

いずれも近代建築の見直し、存在意義の問題意識が根幹にあるように感じられた。建築ジャーナリズムを通じて川添登がそういったことを行ってきたのは近代建築の批評を重ねていく中で作品の中にある良きもの継承していくことが重要であると本人が考えていた為だと私は考える。よって、近代建築に焦点を当てた評論を展開していた川添登は建築ジャーナリズムを目的としているのではなく建築ジャーナリズムを手段として近代建築の在り方の見直しを行っていたのではないかと私は考える。

## 5. 参考文献

- 川添登 「現代建築を創るもの」 彰国社 1958 年  
 川添登 「建築と伝統」 彰国社 1971 年  
 川添登 「メタボリズムとメタモルフォーシス — 私の 20 世紀建築回顧」 『C&D』 120 号 vol. 31 1999 年 pp. 54-56  
 川添登 「ポストモダンとポストモダニズム — 脱近代の混迷の中で—」 『建築文化』 442 号 1983 年 8 月号  
 川添登 「いわゆるポスト・モダニズムについて」 『A+U』 100 号 1979 年 1 月号 pp. 3-6  
 川添登 「都市の崩壊と建築家の思想」 『SD』 50 号 1969 年 1 月号 pp. 22-30  
 川添登、藤森 照信 「連載・戦後のモダニズム建築の軌跡・丹下健三とその時代 03」 『新建築』 73 号 1998 年 3 月号 pp. 160-167  
 丹下健三 「近代建築をいかに理解するか—伝統創造のために—」 『新建築』 30 巻 1955 年 1 月号 pp. 15-18  
 宮内嘉久 「著書の解題 : 建築ジャーナリズム無頼」 『INAX REPORT』 No. 172 2007. 10 p. 20~39  
 宮内嘉久 「黄金は瓦礫に 充実は空白に……またはその逆」 『建築雑誌』 Vol. 92 No. 1129 1977. 10 pp. 11-12  
 アンケート : 「そごう」をどうみる? 『新建築』 1957 年 8 月号 pp. 18-22  
 『建築雑誌』 Vol. 92 No. 1129 1977. 11 pp. 02-59  
 『建築雑誌』 Vol. 114 No. 1443 1999. 9  
 『建築雑誌』 Vol. 126 No. 1614 2011. 02 pp. 4-15  
 『新建築』 32 巻 8 号 1957. 8  
 『建築ジャーナル』 No. 863 1995. 05  
 『建築文化』 1983 年 11 月号